

Title	In Pursuit of the Author's Voice in Narrative Space : A Study of Hardy's Major Novels
Author(s)	麻島, 徳子
Citation	大阪大学, 2010, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/57897
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	あさ はな のり こ 麻 菫 徳 子
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学位記番号	第 23477 号
学位授与年月日	平成22年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科文化表現論専攻
学位論文名	In Pursuit of the Author's Voice in Narrative Space : A Study of Hardy's Major Novels (物語空間における「作者の声」の探究—トマス・ハーディの主要小説研究)
論文審査委員	(主査) 教授 玉井 暲 (副査) 教授 森岡 裕一 教授 服部 典之 准教授 片岡 悦久 准教授 石割 隆喜

論文内容の要旨

本論文は、イギリス19世紀末に活躍した小説家トマス・ハーディ（1840-1928）を取り上げ、『狂乱の群れをはなれて』、『カースタブリッジの町長』、『ダーバヴィル家のテス』、『日陰者ジュード』、『恋の霊』等の主要小説の物語空間において、作者の声を多様に駆使するハーディの語りの特徴を考察した研究である。論文は、序論、本論5章、結論、および注・参考文献から構成されており、論全体で英文で156ページ、和文400字詰め原稿用紙に換算して約550枚に相当する論文である。

序論において、ロラン・バルト、ミシェル・フーコーらのポスト構造主義者たちの作者性をめぐる議論を踏まえて、作者という機能をひたすら忠実に果たす存在としての記号的作者という概念がハーディの語り手の位置を考察するうえで一定の有効性をもつことを主張する。しかしその一方で、イギリス南西部の農村出身者を代表し、現実界に生きる人間としての主体性をもって語りの現場に登場してくる作者ハーディの存在も閑却できない語りの特徴であると主張する。こうしてハーディの小説の語りにあっては、「作者」とは、記号的存在としての作者と社会的存在として実在する作者とが共存するという二面性をもつ存在であることを明らかにし、この二つの「作者」が複合的に関係しあう場にハーディ固有の「作者性」が見出されることを指摘する。

以下の6つの章では、ハーディの代表作を個々に取り上げ、ハーディにおける「作者の声」の複合的特質の解明をはかる。まず『狂乱の群れをはなれて』において注目するのは、この小説において始めて、物語の舞台となるイギリス南西部地方にウェセックスという架空の地名を与え、これ以降は、ハーディの主要小説ではすべてこのウェセックス地方の地

理的名称に統一をして小説空間を創造したという事実である。この地理的指示記号の統一により、作品単位の個々の作者像を超えて、集的作品群にもとづく作者像が確立されることとなり、これを契機にして、小説の作者および語り手は物語の舞台となる農村生活を熟知した者である（あるいは、そのような者であるらしい）という前提条件が読者との間で了解されることになるのだと、論者は主張する。これはまた、小説の語り手の声にアイデンティティを与えるものであって、これこそハーディの語りにおける戦略的な修辭にほかならないという（第1章）。

以上の議論を踏まえて、論者は、語り手にまつわるハーディの歴史的存在としての個人性——たとえば作家という職業——が物語空間に重大な関与を及ぼした例として、ハーディの最後の小説『恋の霊』を挙げ、この芸術家小説が小説家としてのハーディにとってもっていた意味を語り手の性格から解き明かそうとする（第5章）。

論者は、ハーディの語り手の技法において、作者の声がもつ機能的側面と作者の声の背景を支える主体性とがいかに関わっているのか、後期小説の読解を通して分析を行う。このとき、後期小説に共通する特徴として、主人公における人生の挫折の表象を指摘し、その展開についての考察を主たる目的とする。『カースタブリッジの町長』における事業の敗北者ヘンチャード、『ダーバヴィル家のテス』における墮ちた女としてのテス、『日陰者ジュード』における学問への道を断たれた苦学生としてのジュードについて、これらの登場人物の人生を代弁する立場からの語りを展開していると指摘し、そのありようを分析していく（第2~4章）。

結論においては、語り手のなかに経験的作者と記号的作者が共存する特質こそ、ハーディ固有の小説作品を生み出した根源であると述べ、ハーディの語りにおける対話性・多声性の意味を強調して、本論を終えている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、イギリス19世紀末に活躍した小説家トマス・ハーディの主要小説作品を取り上げ、その小説空間において、物語を淀みなく巧みに語る機能を果たす存在としての語り手と、イギリス南西部地方出身で農村世界の代表であり、かつ作家であるという、現実界に生きる作者ハーディに限りなく近い存在としての語り手との二人の語り手が窺えることを指摘し、この二人の語り手による複合的な語りの中にハーディ小説固有の特質が生み出されている事実を解明した研究である。ハーディの語り手の性格を、まずポスト構造主義の観点から記号的作者としての側面をもつ者として評価したうえで、さらに作者ハーディにまつわる個人的条件のもつ意味との関わりにおいて再検討することにより、小説空間において生起している語りのダイナミズムを鮮やかに把握できたのは、大きな研究成果である。この研究により、『カースタブリッジの町長』、『ダーバヴィル家のテス』、『日陰者ジュード』などの後期小説に代表されるハーディ文学について、その人間性重視の側面を再評価する視角を提示できたのも興味深い点である。また、イギリス・ヴィクトリア朝末期に現われてきたリアリズム文学の閉塞状況のなかで苦闘する小説家ハーディの姿を捉える視点は、ハーディ小説のもつ深みを改めて描出する結果となっている。

ただし、本論文において問題がないわけではない。記号的作者としての語り手の機能についての分析がハーディ小説の具体的な作品の読みの場になるといささか希薄になるのが惜まれる。また、新しい作者像の構築をもう少し鮮明に打ち出しても良かったと思われる。

る。

しかし、これらの点は本論文の本質的な価値を損なうものでは決してない。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。